

第2部 シンポジウム篇

放送大学・放送教育開発センター共催

第1回 大学放送教育国際シンポジウム：「遠隔教育の展望」 第2セッション「テレビ・ラジオと印刷教材の複合利用」



昭和61年11月6日(木) 10:00～16:30

放送教育開発センター 制作棟ホール

司 会 阿 部 美 哉 (放送教育開発センター教授・放送教育)
パネリスト 水 越 敏 行 (大阪大学教授・放送教育)
堀 江 固 功 (N H K 主幹・前放送大学学園制作部長)
箕 輪 成 男 (愛知学院大学教授・出版学)
宮 治 美江子 (東京家政大学教授・文化人類学)

チームメンバー

放送大学

祖父江孝男教授

岡崎 友典助教授

橋本 健ディレクター

放送大学教育振興会

水谷 次男編集本部長

放送教育開発センター

杉 依孝制作部次長

赤堀 正宜ディレクター (助教授)

小町 真之ディレクター (助教授)

島田 裕己助手

1.1. はじめに

○司会（阿部放送教育開発センター教授）

昨日のシンポジウムでも問題になりましたが、遠隔教育のメディアの中で、私どもは放送を非常に重視しているわけでございます。特にテレビとラジオが教育のメディアになるという考え方をとっているわけでございますが、それは、従来伝統的な遠隔教育の基本メディアでありました印刷物、教科書、そういうものを決して否定するわけではなくて、いかに両立させるかということでございます。しかし、重点の置き方から申しまして、印刷教材をもっぱら主たるメディアとし、それにほかのメディアを付加的に加えるという行き方と違ひまして、放送そのものが教育の基本の中に入ってくるという考えをとりますと、放送というもの、そしてその中の映像と音声というものがどういう位置づけになるかということ、まじめに考えていかなければならないわけでございます。

今回の実験は、放送大学の番組の中から一つの番組を取り上げまして、放送に向いたものは一体何なのか、教育のためのテレビ、ラジオはどういう提示の方法があり得るかということを考えまして、ディレクターと教官と、それからまたほかの人々を含めて、特にディレクターの長年の経験と教官の経験を組み合わせた場合に、どういうことを考えてみたらいいのかということでやったわけでございます。

特にそういう実験でございますので、皆さんに見ていただきたい、そして皆さんにその反響を聞いていただきたいと思うわけでございます。私どものねらいの根本は、まず、現に放送大学が放送を教育に使っています。実験のもととして、15回の番組で一つのコースを設定しておるのが放送大学のあり方でございますが、文化人類学の科目の中から第13回目のものをとりだしました。祖父江教授が担当しておられます。文化人類学のコースの中から、第13回「文化変容」という番組を取り上げました。

文化変容というものをどういうふうに提示できるのかということをチームでいろいろ議論をいたしました。祖父江教授、それから、放送大学の教育学の方の専門であります岡崎助教授、それから、従来伝統的な形でそれを提示する

とき参加されました放送大学の橋本ディレクター、それから、私どもの方から、長年NHKでそういう問題に取り組んでまいりました、20有余年にわたりまして教育番組を担当してまいりました赤堀ディレクターが、新しい提示の方法のテレビの映像ではどうできるかということの問題に取り組みました。

それから今度は、同じ問題をラジオで表現することもできるのではないかとということで、同じように放送大学に参ります前にずっとNHKで、やはり20数年の経験を持ち、また、NHKの放送文化研究所とかNHKのディレクターの研修機関で教授などをやっておられました小町ディレクターが、これをラジオに置きかえた場合にはどういうことができるかということに取り組みました。

それで、今度はもう一つの問題が出てまいりまして、印刷教材というものと映像番組をどういうふうにつないでいくか、そのときにはどうしても、何かの形でそのつなぎをやる副教材が要るのではないかとということで、これは新進気鋭の宗教学者でございますが、私どもの島田助手がそういう問題に取り組みました。

そういうふうないろいろな背景から出てまいりました人たちが何回も議論を重ね、研究を重ねました結果、テレビなら、ラジオならこういう提示ができるのではないかという実験ものをつくりました。

テレビでつくりましたときの一つの視点は、映像メディアとしての教授の役割は何だろうか、教授の役割は、基本的にそれはその思想ではないか。とするならば、教授が講義をするのは映像に対してアンチテーゼなのではないかという考えから、祖父江教授は出てこられますけれども、放送大学の現在やっております大部分の番組と非常に異なりまして、祖父江教授は講義をいたしません。

祖父江教授の授っておられます「文化変容」という概念をどういうふうな事実で提示できるかということになりましたので、今から見ていただきますテレビ番組では、ここにお配りしてございます祖父江教授の文化人類学〈第13回〉には、こういう（青表紙）印刷教材がございますがこの印刷教材の内容から骨子を取りまして、内容的に申しますと、その中の約10分の1ぐらいに絞り込んだところで深く掘り下げた映像提示でございます。祖父江教授はインタビュー

ーアー等としては出てまいりますけれども、全然講義はなさいません。講義は、この印刷教材の中にあるわけでございます。そういうふうなものをつくってみました。

それからもう一つは、そういうことをやったときに学生さん方がわかりにくいのではないかということから、島田助手が作りましたのは、こういう（オレンジ色）副教材でございまして、どうやって映像と思想をつなぐかということ考えたものでございます。

同じ内容をラジオでやったときにはどういうふうな絞り込みができるかという視点でラジオ番組を小町ディレクターが中心になって考えたわけでございます。それにも副教材を作りまして、ラジオ用の副教材としてこういう（黄緑色）ものがつくってございます。

私どもは、こういうふうに試作したものが現在の放送大学の番組とどういう違いがあるか、それを学生諸君に実際に試してもらおうと思いました。そこで、岡崎助教授が学習センターで指導を担当しておられますので、千葉学習センターと東京第二学習センターを実験場に使いまして、実際に放送大学の学生の諸君に——と申しますのは、放送大学の学生諸君は一般的な放送大学の番組を現に見ておるわけでございますから、あえてこの13回は見せませんでしたけれども、この新しい方式と申しますか、実験的な方式でつくりました番組を見てもらって、そしてアンケートに答えてもらいました。

そのアンケート結果、こういうふうな実験結果につきましては、岡崎助教授から午後の冒頭にご報告申し上げます。

先生方には大変恐縮でございますけれども、まず私どもの試作しましたテレビの番組45分、それから、ラジオの番組45分を見たり聞いたりしていただき、そして午前中には、その後に引き続きましてマルチ・メディア教育、放送教育で日本で第一人者でございます大阪大学の水越教授にコメンテーターとしてそれを批判していただきます。水越教授の専門の若手の方々、そういうふうな方々のご意見を踏まえてお話をいただくということをやっていただきます。

プログラムの終りまでにぜひ皆様をお願いしたいことがございます。それは、

学生諸君にやりました同じアンケートが皆様の資料の中に入っておりますが、ぜひ後ほどこれにご回答をいただきましてお返しいただきたいと存じます。もう一つの願いは、昼食にお立ちになります前に、学生諸君に聞きましたのを非常に簡便にいたしました、1枚のアンケートをお配りしてございます。この1枚のアンケートに、学生諸君の反応をご報告申し上げる前に、先生方のご意見をぜひお書きいただきたいと思うんです。このアンケートにお答えいただきましたものと、学生諸君の反応と見比べてみたいという、大変ずうずうしい期待を持っておりますので、ぜひお食事の前にこの簡便な方のアンケートにお答えいただきたいと思います。

それでは早速、祖父江教授を中心にいたしまして、メディアを今日生かしていくときには何に配慮すべきかということを討議し、1年ほど、ものは試しでやってみましたことの結果のテレビ番組とラジオ番組をまず視聴していただきたいと考えます。

その後で、各ご専門家の方々にお願いいたしまして、まず文化人類学のご専門の方、それから、出版のご専門の方、それから、ディレクターとして放送番組制作のご専門の方、それから、放送教育という問題の専門の方、四方にご批判を仰ぎ、それから、フロアの全部の方々にご参画いただいて討議を進めたいと思います。

テレビ及びラジオの番組を見ていただきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

2. 番組視聴

「文化変化と文化変容」テレビ試作番組

「文化変化と文化変容」ラジオ試作番組

○司会

こういうものをつくってみたわけでごさいますて、どういうふうなご印象をお持ちいただきましたでしょうか。大変恐縮でございますが、先ほど申し上げましたように、このアンケート用紙にご記入をお願いしたいと思います。

それでは、水越先生の発表をお願いいたします。

水越先生は、先生の学生を使って、やはりある程度反応を見ていただいておりますので、ビデオの報告を含めてご発表をいただきます。

3. 視聴して

○水越（大阪大学教授）

では失礼します。

最初に一言だけお断りをしなければいけないと思いますが、実は今回のシンポジウムに参加するように言われまして、何となく引き受けたわけですが、そうしたら放送教育開発センターの阿部先生の方から祖父江先生の「文化変容」に関する講義のビデオとスライドを送ってきていただいたわけですが、そこで私は、こういう順序で見ました。

（O. H. P. 映写）（略）

まず最初に、ラジオの録音テープを聞きました。これは車の中に、運転しながら、カーステレオにカチャンとほうり込んで聞きました。私の家から大学まで30分でございますので、一回では聞き切れず、往復聞きました。

こうしてまずラジオを聞きました。まあ、これはラジオというよりオーディオ・テープと言うべきですが。それからビデオ・テープを学生と一緒に見ました。それからサブ・テキストを読みました。最後にテキストを読む、こういう順序で私はやりました。

それに対して私の講座（大阪大学 人間科学部 教育技術学講座）に所属しております大学院の学生には、最初にビデオ・テープを見せました。何の予備知識もなしに……。そしてその後、ディスカッションをやりました。このディスカッションをやった模様の一部をビデオで撮りましたので、それを皆様にここで見ていただくということになります。

そうしたら彼らは、サブ・テキストをそのディスカッションの後持って帰っちゃったんです。僕はあわててサブ・テキストがどこにあるか探してもないので、仕方がないので放送教育開発センターにもう一度、恥を忍んでサブ・テキ

ストを送っていただいたんです。これはあったはずなのに、学生が持って帰ったんです。つまり彼らはビデオ視聴 — 討論の後で自主的にサブ・テキストおよびテキストを読んだわけです。なお彼らはラジオは聞いておりません。

今日まず皆さん方に見ていただくのは、何も予備知識のない大学院の学生が、しかも彼らは文化人類学の専攻ではありません。教育工学です。エデュケーション・テクノロジーをやっている学生が、ぽんとビデオ・テープを見せられて、彼らは何を感じたか、どう語っている場面を見ていただきます。それから後に若干のコメントをつけたいと思いますが、私がこういうふうに見たり聞いたりした順序にこだわるのは、結果的には非常に意味を持っているというふうに私自身は考えております。

ただ、このディスカッションの模様のビデオは、大学院の演習が終わった後に入れ込んだんで、だれかがビデオを撮らなきゃいけないっていうんで、そこで、隣の部屋でコンピューター・プログラムをやっておった三回生の学生に、ちょっとビデオを撮ってくれと言って即席に撮らせたものでございますから、くどくど言うようですけれども、もう映像になってないくらいひどいものでございますけれども、その点はお許しをいただきたいと思います。

それでは、時間がございませんので、皆さん方が視聴された45分のあの映像を見られた後、彼らが一体どういう意見を言ったかということをちょっとごらんいただきたいと思います。

(V T R 映写)

この方は北京師範大学から今年の10月1日に来ただけです。

(学生 A) 内容は全面的にすごく広く、あまりにもいろんな例が重なりすぎて、シーケンスが……

後から聞いてみますと、非常にバラエティーに富んだ内容が次から次へと構成されているということを、まずここでは言ったようです。

(学生 B) やはり、先ほど出ました文化変容とか文化受容とかいう概念についての話が何回も、いろんな事例で出てきましたので、そういう場面で、テ

ロップなりその他の形で指示を出してもらおうと、よりわかるかと思います。何が文化受容なのかというあたりが、どういうことを意味しているのかということが、最後までよくわからなかったんですけども、それが技術獲得とか、そういう言葉と同じだという形で、最後になって出てくるわけです。

(学生C) 農業の場面とか、病人を運んでいる場面とか、多分ショットでいけばたくさん数があってももしろかったんですけど、最後まで発散させているような感じがして、いろんなところをくっつけ過ぎているから。途中の段階でいいから一応収束させて、昔のことを整理してみる場面があってもいいと思うんですが、何か、そういう拡散だけで最後までいってしまっているというイメージがあって、やっぱりそういう意味では疲れます、45分は…。

(学生D) 一つの村で変化があったということはよくわかったと思うんです。特に、テレビで造船を見ただけで実物を知らない少年が船をつくった。その子が、将来大きくなってから木工をしているという、そういうことは実例としていろんなケースがあるんでしょうけれども、具体的に実在の人物が昔と現在の両方の画面に出ているというのは非常に印象的で、テレビが文化変容に非常に大きい影響を与えたというような実例として、おもしろかったと思うんです。

ただ、全体としまして、確かに昔と現在の違いはよくわかったんですが、この土呂部というところでなしに、こういう変化というのは日本のどこでも大体一様に見られることなんですね。そういう一般的な20～30年の変化というのを淡々と比較されたんで、ちょっと単調のように感じる場所があったと思います。

この人は今滋賀大学の専任講師で、植物学専攻で、今、内地留学しています。次の学生が一番若いです。

(学生E) 45分の間、まとまりがないというか、何が言いたいのかよくわからないうちに進んできて、最後になって解決に近いようなことを少しぽつと言われた。そこで何か、緊張というか、集中力が続かないようなところがありますね。時間と内容との対応において、少し待ちの時間が多いという

ふうな……。

それと、最初のころ思ったんですけれども、何かちょっと、あまりにも事件の報道みたいな口調でアナウンサーが言われたのが、すごく耳ざわりというか、聞き取りにくかったんですけれども。

(水越) 広場でしゃべっていたのはそのときの女の先生でしょう。あの人を進行係に使っていろいろの場面をつないでいくあの手はもうちょっと使えなかったかなあ。あの人を頼りにしながら、一つの軸にしながら、女教師の語りを入れてから映像に戻って、またあの人の話に戻ってという構成法をもう少しやっていけなかったかしらね。

(学生 F) あの人は4年ぐらいですね。あの村で教師をされたのは。42年から46年ぐらいとききましたが。

(水越) だから、あの人の話を中心にしながら、べつに学校のことばかりじゃなくてさ、村の子供の遊びのことをときどき言ったり急病人を運んだエピソードに触れたり。つまり、番組に筋を通すためには、何か筋を通す柱になるものが要るわけよ。

(学生 F) もう一つあったのは、遊びの変化ですね。あそこでつまり子供がファミコンで一人、熱中してこうやってるのは、全く他所と変わらないし、逆に、アケビ取りとか、水遊びとか今では殆んど見られない。ああいう子どもの遊びの移り変りを比較をするということでは非常におもしろかったですね。

(水越) そうねえ、あれは非常に象徴的やったねえ。

(助手) あれはまさしく、PDからすればあの画がわかればいいんじゃないかというような感。それからお年寄りと子どもが、食の好みが全くちがってきていて、それでいて同じ時間帯に食卓を囲んでいるのが、とても象徴的で……。

今言ったのが助手ですね。

それじゃあ時間がございませんで、これで絞らせてください。

今見ていただいたような討論を、大体30分ぐらいやらせたわけですが、もう一度O. H. P. に戻ります。

(O. H. P. 映写) (略)

私は既に車の中のカーステレオにカセットを放り込みまして、ラジオを通じて文化変容とか文化変化、あるいは文化受容における日本の特殊な受けとめ方というような問題についての祖父江教授のお話をイメージ化しておりました。これは、この番組を理解するのに大変役に立ちました。つまり、ぼんとビデオを見てももちろんわかったと思いますけれども、しかし、そういう意味では、ある程度テキストに近い形のラジオで、しかも音響で、ロックのミュージックとか、グレゴリアン聖歌とオラショの比較とか、というようなものを見ながら、特に僕は例のすきやきの、日本独特の味つけをしてすきやきというのを日本流に食べたというような問題なんかは大変、文化変容というものをイメージ化するのに助かりました。そういうものを既にもっていた私はビデオテープは学生と初めて一緒に見ました。

それから、サブ・テキストを、先ほど申しましたように学生が持って帰ったものをまた送ってもらって読でだ、こういうことなんですが、そういう順序は一つの、ある程度の学問をした人間が、新しい物事を理解していく上で、非常にいい順序ではないかというふうに私は感じました。最終的にはやはりこういったテキストを使っただけの一般化ということが大事だと思いますけれども、最初に入ってくるのは、テキストからというよりも、ラジオー テレビー テキストというむしろこの順序の方がよかったように思います。

そこで、ここで偶然のハプニングですけれども、学生が私の持っておいたサブ・テキストを持って帰ったとか、テキストを持って帰って、自分でコピーをしてみんなに回していたというようなことは、大変おもしろいことではないか。彼らは、これをやったところで単位がもらえるわけではないし、私もそういうことを要求しなかったのですけれども、そういう一種のモチベーションをここで持った。これはディスカッションをしたことにもよるけれども、やはりあのビデオ・テープの持つ動機づけ効果ではないだろうかというふうに思います。

そこでもうちょっとそれを一般化して申しますと、テレビで出すというとき

には、映像の特性をフルに発揮したものがどれだけ出せれるかによって、一つの教材といたしますか、コミュニケーションのメディアとしての教材性が問われるんだという立場をとっております。

そうしますと、映像の場合には、ここにご専門の方たくさんおられるから言うまでもないことですが、常に「現在」しか写せない。「過去」は写せません。あの昭和30年代の土呂部のものも、あれは「村の分校の記録」として「当時の現在」を撮ったものであります。ですから、映像は常に現在しか出せないとか、あるいは常に特殊しか出せない、一般的なことは出せない。そこに出てくるのは常に、ある炭焼き小屋の姿であったり、ある大根をとっておる姿であったり、ある家のカヤぶきから変わっていったというように、その特殊しか出せない。

そういう、ある意味では制約を持っているけれども、逆に言うと、これが非常に強みになる。だから、テレビで出すときには、こういうものが常に「現在」を特殊な具体の形で出すという特性が、どれだけ生きるかということによって、テレビというものを使っての放送の値打ちが決まってくると思うのです。

けれども、放送大学の場合などは、文字を使ったテキストというものをメインの基幹教材として使うわけですから、このテキストと映像教材とメディア・ミックスというのは初めてできる。映像教材でありながら活字教材と同じようなつくり方をしたのでは、それはメディア・ミックスをする必要がないということになります。ですから、思いっきりメディアの特性に徹してもらった方がいい。

それから、現在と過去の問題ですけれども、これは視聴能力がない人はなかなか見分けられないわけですが、今回の試作番組では、偶然にも「村の分校の記録」の場合には白黒で撮っております。それが現在の土呂部の映像には色がついている。そういう白黒とカラーとの比較において、過去と現在に一つの区切りがつけられておる。

かつて私はNHKの〈歳月〉という番組を〈新日本紀行〉の特集版で見たことがございます。堀江さんもお存じだろうと思いますけれども、あのときも偶

然に鷹匠の10年前と現在なんか、あるいは今東光さんの以前と現在というような、全部それがカラーと白黒でつくっていましたが、そういう、色を抜くとか音響を変えるとか、いろんな形で現在と過去とを往復させながらやるわけですけれども、基本的にはテレビは「現在」しか出せない、基本的には特殊なものしか出せない、こういう特徴がいわば今回の映像教材には非常によく生かされておったという点は、私は評価したいと思うのです。

ただ、そういうことがございますけれども、大阪大学の学生も言うておりましたが、若干私なりに注文をつけますと、一つは、番組の核になるものがなくて、むしろ非常にばらばらである。例えば道路がどうなったとか、家のづくりがどうだとか、学校が廃校になったとか、民宿ができたとか、あるいは牛、祭り、あるいは食事の模様、スクールバス、そういったことがたくさん出てきて、それらが現在が来たり過去が来たり、そういう時代による変化のトピックが次から次へと出てくる。中国の北京師範大学の大学院生が最初に、非常にバラエティーに富んでいて、トピックスが非常に豊富なのはいいけれども、絞り切れなかったというふうにちょっと言ったのは、偶然ではない。これは彼にとって日本語という言葉の障害だけではないように思います。

それからもう一つは、いわば彼らが心配したのは、かつての〈新日本紀行〉のような感じの番組で、これで「文化変容」という概念の統合ができるのだろうか、と。というのは、彼らはテキストがあるということすら知らないのです。映像だけ見せられたわけです。そういうことを言うておりましたが、その点については後でテキストとか、さらにサブ・テキストなんかでフォローすることであれば、この番組でなまじ指導講師の祖父江先生が出てきて概念化したりまとめたりという必要はなかったと、私個人は思っております。

ただ、私はこの中でやはりいろいろと学生との討議をしておりましてところで彼らが言った言葉を最後に申し上げたいと思うのですが、一つは、やはり4世代が一緒に食事をするとか、あるいは盆踊りをやったり、お祭りのときに村が一緒にやる、そういう団結というか、一致というか、協力というか、みんな一斉にそろえて屋根をふきかえるとかいうあれを、非常に奇異に思うというか、

ある意味では非常に重苦しい。自分があそこにおったらとても耐えられんだろうというような、一つの重苦しさか、恐ろしさみたいなものを感じたということとをぼつと言ったのです。あの番組を若い世代が見たときに、あるいは東京や大阪だけではなくて、土呂部以外の都市の生活をした学生なり若い人たちがあれを見たときにどういうふうに感ずるかということ。これは番組の良し悪しではなくて、我々ぐらいの年配の過去の時代を知っている人間と、そうでない人間との間にかなり受けとめ方にギャップがありはしないかということを感じました。

ということは、放送大学のいろんな世代の男女、いろんな職業の人によって、受けとめ方は違いやしないか。ねらいはいいですけども、そういうことを感じました。

もう一つは、今も申しましたように大豆から大根に変わろうと、あるいは馬から牛に変わろうと、屋根のふき方が変わろうと、ともかくこの人たちの文化の受けとめ方というものは、独特の日本の、ちょうどすきやきの味で祖父江教授が言われたようなものが何か残っておる。村の基本的なシステム、日本的な人間と人間のかかわりというようなところにおいてはほとんどそのままのものを残しながら、しかし、新しいものを入れ込んでいくという、そういう独特の変容の仕方の一つの典型例である、そんなふうに私は思いました。

最後に、こういうものを発掘されたということは、先ほどもちょっと感じたんですが、一人の力じゃ恐らくできなかつただろう。この「村の分校の記録」というのは学校放送番組ですから、つくられた方も、あるいは、ここにたくさん来ておられるNHKの方も、恐らくこれを文化人類学の教材に使おうというふうな発想を、初めから持たれたとは思えない。そんなふうにつくってないんです、もともと……。だから、トピックが拡散するわけです。

しかし、それが今回のような形で、一つの地域にじっくりと腰を据えて、現在と過去を20年間ぐらいのことを往復させながら、文化変容という問題を使うのに、この素材がいい、これを使おうというふうを考えられるに至るまでのプロセスには、相当いろんな人のアイデア、いろんな人の考え、いろんな人

の問題意識が加わって、何か従来の放送大学版のつくられてきた映像番組の型を破ろうという、そういう、新しいものをつくり出そうという熱望というか、悪く言えば一種の野心みたいなものが共通の問題意識となって、いろんな立場やいろんな専門の方がぶつかられてこういう番組をつくられたのではないかと思います。

ですから、試験番組として出されたこの内容については、私は大筋において非常によく理解できたと思います。もう少し、これから後、こんなものを使いながら筋を限定したりトピックを限定したりする基本的な、そういった細かい工夫はもちろん今後も続けられるべきだと思いますが、大筋においてこういった番組が放送大学の映像教材として出されるならば、ラジオや、あるいは活字テキストのメディアとうまいチームを組んだメディア・ミックスができるのではないかというふうに私は感じました。

ちよっと時間が長くなりましたが、以上でございます。（拍手）

○司会

それでは第2セッションの討議を始めさせていただきたいと存じます。

この討議では、一番最初にちょっと意図を申し上げましたように、どうやって放送メディアを活用するかということで、それを大学の先生と、番組を制作する人、印刷物をつくる人、そういうふうな、長年にわたって違う専門できた人たちがぶつかり合って、チームというよりはぶつかり合う場を設けて、1年ほどにわたって先ほどご覧いただきましたようなものをつくってみたわけですが、それぞれの意図等があるわけでございます。

それに対して、先生方、ご出席の方々にもアンケートをさせていただきますので、その集計もしてございますので、それもまた後ほどコメントをしていただきますけれども、まず専門の方々からご意見を賜る。先ほど水越先生のお話を賜りましたが、これから、制作の方面で非常に長いご経験をお持ちの堀江さん、それから、印刷物をつくるということでは大変長いご経験をお持ちの箕輪さん、それから、この学問の意図がどう伝わっているかということで、文

化人類学の同僚でいらっしゃる宮治さん、このお三方にまずコメントをいただきます。その後でモニター調査の結果について岡崎さんに報告していただきまして、その次に祖父江先生から、この、コース・チームと申しますか、あるいはチームと申しますか、その意図のご説明をいただき、ちょっとその中の方は祖父江先生にまとめていただくということをやって、そこで休憩をいたしまして、その後で全体討議に移ろうと考えております。

まず最初に、堀江さんはこの放送大学が始まりましたときの初代の制作部長として、3年間にわたって番組制作にかかわっていただいたわけございまして、現在はNHKに戻っておられますけれども、まず堀江さんの方からご意見を賜りたいと思います。

4. 制作の視点から

○堀江（NHK主幹）

私は、この放送大学をつくるときに3年間、制作部門の責任の一端を担わせてもらいましたが、その3年間の自分の仕事と、今の仕事のこのテレビを見せていただきまして、非常に慚愧の念にたえないのでございます。私がおりました3年間の仕事の中の何%が、これだけの仕事ができただろうかと思ひますと、非常に、何か顔が赤くなる思ひがいたします。

昨日のパネルのときに学長が、テレビのスイッチをひねれば肖像画ばかり出てくると言われましたが、何かほんとにもう心が痛みました。また、タイの先生、それから、韓国の先生が、こういうふうにして先生方と、まあ、いわゆるデリバリーのための努力をしているんだということをお聞きした時に、私は制作部長在任中、大学の先生方とどこまで話し合いを深めたのか、どこまでその努力をしたのかということを思ひますと、今日の、放送教育開発センターのおやりになった仕事に批判がましいことを言えなくなる思ひがいたします。

こういうことは弁解になってしまいますが、それはともかく、立場を変えまして、冷酷に、今日の作品について私なりの感想なり意見なりを述べさせていただきます。

水越先生は、テレビとラジオとまず聞いて、それからガイドを読んでテキストを読んだということですが、私は全く逆でございまして、最初にガイドを読みました。それから印刷教材を丁寧に読ませてもらってから、テレビを見ました。それで最後にラジオを聞いたわけでございます。

そういう順序で私は見たのでございますが、まずテレビの方から申し上げたいと思います。正直に申して、私はテレビの作品としましては大変不満でございます。これは私たちの同僚のディレクターに申し上げる部分でございますが、大変不満でした。もっと工夫したつくり方があるじゃないか、なんであんなに素材だけを次々と並べているんだ、これだと、昔はこうだったけど今はこうだったなあ、あれもそうだ、これもそうだっていうふうに非常にばらばらに事実を確認させるだけで、私はわかりませんが、これが実際祖父江先生のねらいになったことなのかなということで、不満でした。

テレビの手法では、具体的なイメージを積み重ねながら、途中で「これを文化変容と言う」というような言葉が入っておりますが、ドキュメンタリー的手法では、そういう主題は言葉でいうのではなく自然に浮かび上がってこなきゃならないと思うのです。感じ取ってもらわなきゃならないものを、言葉でいっている。演出にもう少し工夫があったんじゃないかっていう気が最初見まして……。正直いたしました。

しかし、それだけばらばらな作品ですが、最後まで飽きずには見てしまいました。それは私の感情が入ったことがあったかと思うんです。つまり、「村の分校の記録」という、私たちの仲間がつくった昔の映像と、途中でちらと出てきた卒業式の場面、これは最初のと時から15年くらいたった記録ですが、それから、さらに15年たった今度の仕事と、ほぼ15年おきにとらえられている。よくも悪くも日本のいろんな変わり方を、日本の今の中では一点的に残っている、映像的に具体的に追いかけているという地域が土呂部しかないと思うのです。ここの放送大学に、35年のころ、それから48年ごろ、それから今と、3回にわたって土呂部という地点の記録が残されたことは、これからあと10年ぐらいたって追っかけていくとまたどう変わるのか、これは貴重な

財産になると思うのです。そういう意味では、淡々とつくられている映像に非常に興味を持ったわけです。それが逆に、祖父江先生のおっしゃっている文化変容なのかなってというような感じがいたしました。

もう一つ奇妙に思いましたことは、初めにガイドを見ていたものですから、このガイドを見てテレビをみますと、要するにテレビがあるまとまった仕事、あるまとまった主題とか概念を中途半端にまとめるんじゃなくて、学習者自身——私自身ですが——がこのガイドに従って、どこがそうなのか、どうなのかというふうに、受け身的じゃなくて、素材の中から逆にその主題を書いてあるガイドに従って見るということになると、生はんかにまとめてもらうよりは、学習者の立場としては非常に主体的にその映像に取り組めるという感じがしたわけでございます。

私がつくりました幾つかの大学の先生方の放送大学の番組は、そういう視点で見ると、学習する側が主体的に取り組むようなものではなく、あくまでも受け身、先生のご高説をじっと承る、途中で飽きたら自分が悪いと自己を責める以外に方法がないようにつくられているような気もいたします。

ところが、この番組はそうではない。逆に、テレビガイドなりなんなりをもって、自分なりにとにかく文化変容なり文化変化なりに取り組んでみる。その素材なり方法論なりが、幾つか散らばっているわけでございます。祖父江先生自身が非常に繰り返し、文化変容みたいなところのインタビューをなさっている。「いつごろですか」、「いつですか」、「何が変わっているんですか」、と。あの辺のところは、一つのフィールドワークの方法として重要なキーワードなのかなんていうような感じも——もしある人がフィールドワークの方法論を学ぼうと思えば、その視点で見ても学べる。材料を調べようと思えば、材料も調べられる。それから、どこが文化変容なんだってということで、変わらないものは何なのかということを発見する気になって、ばらばらにその具体事実を追いかけてやろうとすれば追いかけられる。そういう作品だったような気がして、テレビの作品を一つのまとまりとして見るという従来からの見方からは非常に不満な作品で、しかし、メディア・ミックスと、放送大学のように、概念化する

仕事、先生の主張はテキストに書くというようにメディア・ミックスするような場合には、こういうテレビ番組があった方がむしろいいんじゃないかという、新しい発見をしたような思いがしたわけです。

それは私どもの教育テレビ——大学に限らず、テレビ界全体なんでございすけど、何でもかんでもある種のまとまった作品を出し続けている。作品をつくるとは、つねに完結しようとする。一本の筋を通さなきゃならないような気がしてくる。どうもそうなると、学生なり受け手は常に受け身の姿勢にならざるを得ないが、この作品は、学習ガイドがある限り、ある程度主体的に映像処理、頭の中の概念構成っていうんでしょうか、そういうものができるようなつくり方をしているなという意味で、ある種、テレビの番組を非常におもしろく拝見しました。

もう一つのラジオですが、これに反して、ラジオはさすがに音声なんだ、音声というのはしょせん概念を教えることなんだなあということがつくづくわかりました。恐らくはそのわかりよさ、文化変容とは何かっていうことの知識を受けるという意味においては、ラジオの方がはるかにわかりいい。しかし、これは極めて受け身的に私は聞かざるを得ない。そこで自分が能動的に、あれっと思いながら聞くような態度は私にはできません。へえー、こういうことがあった、あ、そうなのか、と。やはり牛乳型があるのか、それこそすき焼きみたいなものがあるのか、それから、洋服のあれがあるのかとか、あ、なるほど、そういうふうに見てみればいろんな我々の生活の中にあるんだなあ、おもしろい見方もあるものだって、そういう理解をどうしてもラジオでは受け身的にしてしまう。

そういう意味では、ラジオとテレビのこの2本の作品というのは、これからの大学教育のあり方に相当大きな示唆を持った仕事ではないかと私は受け取ったわけでございます。

○司会

どうもありがとうございました。

5. 印刷物の視点から

では引き続きまして箕輪さんをお願いいたします。箕輪さんは、ご承知の方も多いかと思いますが、東京大学出版会を事実上おつくりになった方でございまして、東京大学出版会が今多くの学術書を出しておりますが、ユニバーシティ・プレスというものをつくれ、それから、国際学術出版連合の理事なども長年やっておられまして、10年ほど前に東京大学出版会から国連大学に移られまして、国連大学の学術情報担当の局長をしておられたのでございます。昨年からは愛知学院大学に移られまして、愛知学院大学で国際コミュニケーション方面のことをやっておられる先生でございます。

箕輪さん、よろしくお願いいたします。

○箕輪（愛知学院大学教授）

きょうは、放送大学の印刷教材について意見を何か言えということでお呼び出しをいただいたわけです。お送り頂いたテレビとラジオの放送教材を見、あるいは聞きますと、補助教材と正規の教材の両方が大変よくできておりまして、何も申し上げることはないと感じたわけでありまして、そう言ってしまいますとおしまいになってしまいますので、きょうは、素人の立場から、多少一般論的なことをお話ししてお茶を濁したいと思っているわけです。

私は遠隔放送というものにつきましては全くの素人でございますし、今ご紹介いただきましたように、教育そのものについても新米でございます。しかし、この放送大学が始まる以前から、この大学につきましては大変関心を抱いておりました。

というのは、きのうの第1セッションでもそのお話が出ましたが、この大学ができることによって、今までの日本の伝統的大学がインパクトを受け、それが望ましい大学改革につながっていく、そういう効果への期待がこの大学に込められていると思ったからです。そのような意味で、この大学の発展につきましては私も大変注目をしてまいったわけでございます。

ところが、その放送大学の仕事の重要な一部であろうと思われまます印刷教材を見ますと、どうも私の期待したようなところにいてないような感じがして

いるわけであります。

イギリスの公開大学が大変有名になりました。大成功と評価されまして、学長さんが女王から爵位をもらったりいたしましたけれども、公開大学はなんでそれほど評判になったかといいますと、テレビの番組がよかったからではございません。印刷教材がすばらしいというので、あれは有名になったわけがあります。公開大学以前にも同様な例があります。オックスフォード大学やケンブリッジ大学が世界的に有名になりましたのは、やはりこれらの大学の出版部が出している出版物によってであります。

ところが、放送大学の印刷教材を幾つか拝見いたしましてびっくりいたしました。ドクター・コースの教材か博士論文ではなかろうか。大学の先生が、だれも読まないと言われる紀要にお書きになるような論文ではないかと思われるような内容の教材があるわけです。びっくり腰を抜かしたわけでありますけれども、それでは一体なぜ放送大学の印刷教材はそうってしまったのでしょうか。きのうから第1セッションに参加して、いろいろお話を伺っていてわかって参りました。第1に放送大学においては印刷教材に対してあまり大きなウェイトをおいていないらしいということです。これは意図的にそのようになさっているらしい。放送大学においては「放送」に重点を置いて編成しているんだということをおっしゃいました。

ところが、きのうのセッションでご報告がありましたように各国の遠隔教育というものは、アメリカの場合はちょっと独特でございますから、別にいたしまして、印刷教材とかスクーリングとか、そういうようなところを中心にして教育を考えているわけであります。テレビ、ラジオというものはあくまでもサプリメントと考えているように思われるわけであります。

きのうタイの公開大学長スリサーンさんは、どのメディアもそれ単独では完全ではなく、それぞれに長短がある、だからメディア・ミックスで最高の効果を上げていくんだ、それが遠隔大学だとおっしゃいました。ところが夜のレセプションのときにはスリサーンさんは私に、実はお金があればテレビでもなんでも使いたいんだが、途上国でお金がないから印刷物に重点を置いているんだ

というようなこともおっしゃいました。彼の言ったことは昼と夜とでちょっと食い違うんじゃないかと思ったんですが、金のあるなしにかかわらず、テレビが向いている伝達内容と、印刷教材の方がはるかに経済的に、有効に伝達できる内容とがあらうと思うわけです。

例えば今回の試作品「文化変容」のテレビ、ラジオを伺っておりましたが、そのことがはっきりしていると思います。印刷教材とテレビあるいはラジオとの分業というものが、非常にはっきり出ていたと思います。阿部先生が、テレビ、ラジオは10分の1のところに集中して深く掘り下げたとおっしゃいましたが、まさにその通りで印刷教材には文化変容の定義でありますとか種類でありますとか、いろんな要素が八つのヘディングで述べられておりますが、その中の一番最後の二つぐらいのところ、日本における戦後の変容、あるいはその変容に対する評価というところだけをテレビとラジオは取り上げていたように思うわけであります。いみじくもここに印刷教材とそれ以外の方法との分業がはっきり出ておるわけでありまして、このテスト・ケースに関する限り、とてもうまくそうした分業ができていたように私は思いました。

というわけで遠隔教育においては種々のメディアをその長所を生かしつつミックスして利用すべきであることは明らかですが、この放送大学においてはどうも「放送」に重点を置いてお考えのようであります。そのためにどうしても、印刷教材が軽視されるといううらみがあるように思います。実際にどうやって放送大学で教材をつくっているのかを伺いましたら、先生方に原稿をお願いいたしまして、できたものをいただいてきてそのまま印刷していると伺いました。だからとても難しくて、放送大学の教材とは思えないようなものの中には出てしまうということのようであります。

きのうテレビ番組についてのお話で、ディレクターの方と先生方との間でたばこ盆の投げ合いがあったりして、命がけでつくっておるといって報告を伺いまして、さもありなんと思ったわけです。テレビというのは大変大きなお金がかかりますから、そのぐらい真剣にやらないとこれは大変なことになってしまいます。

ところが、本には大したコストはかかりません。ですから、このごろでは素人でも自費出版で簡単に自分の本をつくったりしまして、それが売れたりいたしますけれども、大変手軽であります。その上、活字というものがくせ者であります。原稿を印刷所に送れば何でも活字に組んでまいります。そして活字に組んだものはなにかもっともらしく見えるわけであります。活字の魔力であります。なんとなく本ができたように思ってしまう。そこに落とし穴があるように思います。

ことに日本の本づくりの伝統におきましては、編集の機能というものが大変軽視されてまいっているわけであります。大体著者は、自分の書いたものは完全であるとみんな思っているわけでありまして、編集者がそれに対して手を加えるとか注文をつけるなどということは、とんでもないのであります。そういう傾向の最も強いのが大学の先生方であるわけでありますから、学術書というものは、今の日本の出版の世界では一番おくれた部分だと思っております。

本の場合でも、大量生産いたしますマスプロ、マスセール出版の場合にはかなり大きなお金が動きますので、いいかげんな編集はできませんから、編集者の機能がよく働きます。しかし、学術書の場合にはうまく働かない、そういう伝統に日本の出版の世界はあるわけであります。われわれはそういう編集者を御用聞き型の編集者、あるいは紙くず屋さんと呼ぶのですけれども、なにか書き散らした原稿をいただいてきて印刷屋に回すだけで本ができていく。しかし、テレビの場合と同じでありまして、本も著者に任せておいていいテキストができるはずがないのでございます。

そこで、もし放送大学が、印刷教材をテレビ等に対するサプリメントであると軽くお考えになるとしたらば、第一の問題としてこれは非常にまずい点ではなかろうかと思うわけです。

2番目に、仮に印刷教材をテレビ等に対して従の立場、サプリメントであると規定した場合でも、それはそれなりに、どのような方針で、どのようにつくっていくのかという、ポリシーとかガイドラインというものがなくてはならないと思うんですけれども、日本という国ではそういうふうにはいきませんで、

いきなり駆け出しまして、あとから考えていくというやり方が多いようでございます。

きのうはレセプションで木田先生から、放送大学をつくるのに根回しに20年かかった、しかし、できた後は走るのは速いだろうというお話がございましたが、ただ走ればいいというものでもないだろうと思うわけです。20年根回ししておりますうちに、初めのアイデアがだんだん変更されまして、方針がいまいになってしまった点もあるのではなかろうかと推察いたします。印刷教材に関しましても、やはり十分な基本構想なしに始まってしまったということがあるのではないのでしょうか。その結果が、これまでの放送大学の印刷教材にあらわれていると思うのであります。

しかし、本というものは読者をはっきり想定いたしまして、それに合うように内容、レベル、あるいはその組み立てを考えていくものであります。また、物的なプレゼンテーションも相手次第で考えていかなければいけないわけでありまして。例えば、出版社では、新書判をつくる時には高校2年生が読んでわかるようにということでレベルを設定してまいります。放送大学の場合にも当然初めにいろいろな方針、あるいはガイドラインが考えられたと思いますが、現状ではそういうものが必ずしも十分機能することなく印刷教材がつくられているように思われます。

さて一般論は別にしまして今日の、試作されました印刷教材、一準教材と本テキストの両方とも、大変よくできております。これは試作品でございますので、大いに注意をなさって、印刷教材づくりにもプロの方がお加わりになった結果だろうと思いますが、大変よくできておるわけでありまして。こうしたよく出来た例を見ますと一層、印刷教材作りのポリシーの貫徹ということの重要さが考えさせられるわけです。

ここには「文化変容」についての理論指導が整序的に示されておりそして、テレビとラジオのプログラムが理論的学習に対してインセンティブを与え、刺激剤としての役割を果たすというそのコンビネーションが大変うまく構築されているのを見まして、さすがだと思って感心したわけござ

います。

もちろんこれは一般論でございまして、印刷教材につきましても、改善の余地は多々あるように思われます。しかしそうした改善はどのようなレベルの人を相手に、どういう教育をやるのかということによって決まってくるわけでして、その定義がなくては余り的確な批評は出ないわけでございます。

いずれにいたしましても、印刷教材、これなくしては放送大学の遠隔教育というものは成り立ち得ないと思います。印刷媒体の持つ抽象性が、大学レベルの教育にはどうしても必要な高度な理論を伝えるのに非常に有効であるからです。印刷教材がなかったらたとえば今日のテレビプログラムなども、すでに諸先生のご指摘もございましたように、単なる事実の羅列、提示ということに終わってしまって、果たしてそれで大学レベルの教育と言えるのだろうかということになると思います。

以上感じたところをお話いたしました。

○司会

どうもありがとうございました。

6. 文化人類学の視点から

では次に、文化人類学のご専門で、アフリカでフィールドワークをやられたり、また、現在では東京家政大学の方の教授をしておられます、やはりこれは大学の学問ということでございまして、そういう専門の教育をしておられる方から、一体これが教育のメディアとしてどういうふうなものとして受け取られたかということで、宮治先生にお話を承りたいと思います。

○ 宮治（東京家政大学教授）

文化人類学を10年ほど前からあちらこちらの10ほどの大学で教えてまいりまして、文化人類学の現場の教師の一人として、それからまた、昨年从今年にかけて、たまたま放送大学の川田先生の『アフリカ論』の時間に1回だけですが、出講する機会がございまして、番組づくりに参加させていただいて、そのご苦勞のごく一部をかいま見させていただいたという経験もござい

ますので、そういう経験なども踏まえまして、今回視聴させていただいたテレビ、ラジオ、印刷教材の扱い方、あるいは内容について2～3の感想を述べさせていただきますと思います。

まず全般的な感想としましては、今回の番組は「文化変容」という分野で、祖父江先生ご自身が関心を持たれ、また、数々のすばらしい研究業績を上げていらっしゃる分野であり、それにまたすばらしいチーム・メンバーを得られて、テレビ、ラジオ、印刷教材ともに、これは今さら申し上げるまでもございませんが、現在文化人類学の講義番組としては望み得る最高水準の内容であると、感銘を受けました。

テレビとラジオの教材それぞれに工夫され、その特色がよく生かされていると思いましたが、とりわけ私は、ラジオ番組がきめ細かくよくつくられていると感心いたしました。

文化変容の定義、理論、学説史的な背景から始まって、その具体例がアメリカその他の諸外国の例と日本の例、古い時代のものと新しいもの、そうしたかなり盛りだくさんな豊富な内容が大変バランスよく配置され、また、インタビュー形式を使ってご自分の体験として自然な形で語られ、音楽あり日記の朗読ありで楽しく聞け、そして考えさせられるというわけで、ラジオでこういうエキサイティングな講義が流されるということになりますと、私ども現場の教師としては正直なところ、うかうかしてはいられない、大分工夫しなければと感じた次第でございます。

そういう意味で、昨日の、既存の大学の授業との関連というお話でもございましたけれども、このような番組は、日本の文化人類学の授業に一つのカルチャー・ショックを与えるのではないかという気がいたしました。

テレビの方は、これまでの、講師が出てこられてずっと講義をするという形式に対し、ナレーションを入れたドキュメンタリー・タッチで進められていますが、山村の30年間の生活文化の変化が実にわかりやすく比較されていて、これもまた私は大変おもしろく見ることができました。

これはスタディー・ガイドにありますように、人類学の中心的な研究方法と

されるフィールドワークを講師とともに行うという形式を取り入れてありまして、祖父江先生が村の人々に直接インタビューをされ、村の人が語っているのが映されて、受講者はまるで自分が先生と一緒にフィールドワークをしているような気分になるのではないかと思います。

もっとも、ドキュメンタリー手法というのは、百聞は一見にしかずで、生活様式の違いや変化を示すには大変有効なのですが、ともすればテレビ番組にしばしば見られますように、見せることに重点が行き過ぎて内容が浅くなってしまうという危険がございますけれども、放送大学の場合は印刷教材の柱がありますし、さらに今回は懇切なスタディー・ガイドというものもついております。そのスタディー・ガイドが上手に受講の仕方を手引きしてあり、その効果が十分に引き出され得ると思われました。

また、これは先ほどのアンケートの結果でも意見が分かれるところではありますが、主任講師が出ていらっしゃらないのをどう受け取るかという点について、私の個人的な意見を申しますと、やはり講義として見たときには、最初か最後に先生が少しでも顔を出されて、講義の全体の流れの中でのこの番組の位置づけとか、次の番組への橋渡しになるようなこととかを一言二言おっしゃった方が、講義の継続性・連続性ということを印象づける意味では効果的でなかったかという気がいたしました。

一人で通してしゃべる方式ですと、確かに、講師の方々がなれない場合は、特に最初のうちはぎこちなくなりがちですけれども、ドキュメンタリー・タッチも最初は新鮮ですが、やはり毎回ではちょっと飽きがくるかなという気がいたします。ただ、文化人類学では現実には人々の生活様式の違いをできるだけ具体的に教える必要がありますので、フィルム教材の使用はとても大事で、特に、言葉では伝えにくい、文字でもあらわしにくい人々の表情とかしぐさとか、それから、村の全体の雰囲気、そういったものはこういうフィルムでこそ伝えたいというところでございます。

特に、私自身教えている立場から申しますと、今の若い学生は、単なる話として聞くよりも、積極的に視覚や聴覚に訴えるものに興味を持つということが

ありますので、私自身は自分自身のフィールドワークのスライドを見せたり、現地の民謡のカセットなどを聞かせたり、あるいは写真や図のコピーを配ったりしておりますが、今度のようなビデオフィルムを私たちも利用できるということになりますと、大変ありがたいと思います。

特に、日本の人類学者も現在ではかなり世界のあちこちでフィールドワークをしておりますし、そういう資料も相当に蓄積されております。また、写真家その他の方々も多いので、著作権や映像権その他いろいろな難しい問題はあろうかとは思いますが、例えばエスキモーやブッシュマンの話をする講義には関連のフィルムを簡単に借り出せるような、フィルム・ライブラリーのようなものができたらいいと日頃思っております。大阪の民族学博物館が主として物を集めているということであれば、この放送教育開発センターの方は映像と音の一大センターとして、そういうライブラリーなどをつくっていただけると大変ありがたいと大いに期待しておりますし、そのためには、フィルムその他の提供等で私たちも協力させていただけるのではないかと考えております。そういうことで既存の大学や研究所との相互交流が盛んになって、お互いに刺激し合うシステムができれば大変よいのではないかと思います。

確かに、印刷教材、テレビ、ラジオの教材をそれぞれの特徴を生かしつつ、いかにバランスよく、しかも、その一つ一つが一応のまとまりを持ったものとして制作し、使いこなすかというのは大変難しいことだと思いますが、今回の番組は、それが可能であるということを示す一つの模範例を見せていただいたのではないかと思います。

つぎに内容につきましては、これはこれで大変まとまっていて、特に申し上げる必要もないのですが、あえて何か言えというご指示もございましたので、内容について若干申し述べさせていただきますと、例えばテレビの土呂部の例ですが、アンケート調査にも、これが文化変容の例として適当であったかどうかというような質問がございました。まずこういう、村の変化の典型性や、どの程度一般化し得るかとか、普遍性の問題などがございます。私は北アフリカのアルジェリアやチュニジアで調査をしておりまして、アルジェリアの北部山

岳地帯、アトラス山中のカビリー地方のベルベル人のフランスへの出稼ぎ村の調査をしておりますが、その村の変化を見ましても、非常に似通った経過をたどっているところが多いんですね。

ちょうど私が最初に参りましたのは1969年から1970年で、1969年に水が入りまして、1970年に電気が入りまして、それからやはり道路が舗装されて、そして電化製品が普及し始めて人々の生活様式が変わっていく。それこそ昔は肉も1年にお祭りのときぐらいしか食べなかったのが、肉屋もでき、パン屋ができ、雑貨屋ができて、首都アルジェと同じようなものが売られている。そして、村の中なのに野菜さえも売られているというような状況、それが非常に似ているところで、もちろん違うところもたくさんございますけれども、かなり普遍的な現象です。それは祖父江先生も触れておられますけれども、そういう世界大的な西欧化や都市化、すなわち文化変容の現象の一つとして、十分一般化できる一つのおもしろい事例と感じられました。

それから、先生は印刷教材の最後で、文化変容というのは物質文化の変化、人間関係の変化、それから、心理と意識における変化という三つの側面があるということを挙げておられます。このテレビの中ではやはり映像というものの持つ強み、それから、視覚的にとらえられるというところから、物質文化の変化が中心に語られていたと思いますが、人間関係の変化について、もちろん番組の中でも出てまいりますけれども、私などは、例えば村の女の人たちに嫁姑関係はどう変わったかとか、そういうことなども聞いてみたいと思いました。また、カヤぶき屋根がカラートタンに変わったということなどは、単に物が変わっただけではなくて、当然共同労働の形が変わる。昔はカヤぶき講とか手間貸しとかいたしましたがけれども、そういう共同労働がだんだんなくなり、そして人間関係も変わっていく。それは、例えばさきほどお話したアルジェリアの村でも同じで家の建て方が変わって、人々の人間関係が変わっていくんですね。

ですから、物質的な面では文化変容について大変肯定的な評価を村人たちはしておりますけれども、人間関係について聞きますと、やはり何でもお金で解決するようになって、人間関係がだんだんぎくしゃくしてきたというような反

応がございます。それで土呂部でもそういうこともちょっと聞きたかったという気がいたしました。

それともう一つは、若い人の声が聞きたいとも思いました。

それから、時間がございませんでかいつまめますけれども、ラジオにつきましては大変よくできていておもしろく拝聴したんですが、若干説明が必要ではないかと思ったところもございます。例えば先生は、1930年代に文化変容がアメリカの時代で出てきて、その定義などもされた。それから、日本での高度成長期の変化をとらえられているんですけども、昭和30年代というのは日本人にとっては海外への渡航者が飛躍的に増加した時期で、大げさに申し上げればいわば地理上の発見期のような時期だったわけです。そういう時期がやはり日本の文化人類学にとっても発展期であったということなど、これは先生がほかのご本でももちろん書いていらっしゃるのですが、日本の文化人類学にとってのこの時期の持つ意味について。

それから、先生は昭和29年に留学されたとおっしゃっていますけれども、この時代の留学というのはやはり超エリートの印でありましたし、飛行機で行かないで、もちろん船でいらしたのではないかと思います。そういうことなども今の若い人には説明しないとわからないのではないかな。

また、病気のときのおかゆやアイスクリームというのも大変おもしろく伺ったんですが、電気冷蔵庫の発達とともに暖房設備がよくなって、瞬間湯沸かし器とかタイマーつきヒーターなどが普及し、それとともに、今の若い世代には冬の家の中の寒さなどもわからないというところがあると思います。

受講者の世代構成を見ましても、大体20代から30代で50数%という表を拝見しましたけれども、若干そういう状況説明、配慮が必要という気がいたしました。

文化変容について、すべてのことをこの45分、あるいはこの何ページかの中に含めるのはとても無理でございまして、それを考えると、なかなかこれ以上のきはないというきばえだと思うのですが、若干つけ加えさせて頂けば、外から日本への影響を中心に構成されましたけれども、逆に日本から外への影

響についてちょっと考えさせてみるとか、それから、これは「国際交流」という次の御講義で触れられるとは思いますが、文化接触の形が現在非常に変わってきている。ですから、最初の「文化変容の定義」にかかわるところでございませけれども、異なる文化の持続的・直接的接触ということ、その直接的というのをどうとらえるかということですね。もうマスメディアが発達して、世界が非常に緊密なコミュニケーション・ネットワークで結ばれている時代に、こういう文化変容、異文化同志の直接的な接触やその結果の変化というものをどういうふうに位置づけ、そして解決していくか、そういうようなこともちょっと感想として感じました。

○司会

中身にわたって大変適切なご指摘をいただきまして、ありがとうございます。

7. チームメンバーによる発表

では、こういう専門家がこのようなものを見たときの一つのコメントをいただいたわけですが、学生の諸君が一体どういうレスポンスをしてくれたかということを岡崎さんが調べてくださっております。その岡崎さんのモニター調査の結果というものをご報告いただきたいと思います。

○岡崎（放送大学助教授）

きょうお手元にお配りしております資料——調査表は昨日お配りしてございます。結果につきましては、2種類ありまして、ひとつは調査表に沿った基本（単純）集計表です。もうひとつは調査表にございます自由回答の部分を全部書き出したものです。加工を加えて数量的な処理も考えましたけれども、もうざっくりばらんに全部お出しして、先生方のご参考にしていただければと考えた次第です。

とりあえずきょうは、主な結果の特徴と、あと、特に目立ったところを、スクリーン化しオーバーヘッドでプロジェクターを使ってご説明したいと思います。

（O. H. P. 映写）（略）

まず、放送大学のことにつきましては、要覧等でご存じだと思いますけれども、今回モニターにとりましたサンプル数は127人になります。入学年度が'85年の方が4分の3、それから、'86年度が4分の1、それから、性別では女子が多い、年代では30代、40代ということになりますが、これは決して放送大学の縮図ではありません。先ほどご紹介ありましたように、調査実施は、『文化人類学』の科目は面接授業を持っておりません。そこで私が担当しております。『教育社会学』及び『教育学概論』の面接授業の学生(千葉、東京第一、東京第二の三つの学習センターの五つのクラス)を対象に調査を実施いたしました。

そういう面で決して放送大学全体の縮図にはなりませんが、今回のテーマ、文化人類学、それと特に、教育の方でいいますと、『教育社会学』では「学校の近代化と外国教育の受容」という章がございますし、「文化と教育」というタイトルもあります。それから、『教育学概論』では「教育の文化的基礎」というものに1章をとって学習をする。

そういうこともございまして、このテーマ専門の学生たちではありませんが、また、専攻も違うんですけれども、一応今回の調査の意図を説明いたしまして、しかも、15回の中の1回分ではあるが、次の条件、つまり、テキストを読み、それから番組を視聴し、前後しますけれども、視聴のときに事前に15分ほど時間をとりまして副教材を、見る直前に読ませました。テキストは、放送大学で5回面接授業がございますので、4回目のときに、2週間の間によく読んできておくようにという条件をつけまして持ち帰らせております。という条件で調査を実施いたしました。

ただ、時間や、それから後で分析していろいろ参考にするために、ラジオだけのグループ、テレビだけのグループ、それから、テレビとラジオ両方という、大きく分けて三つ。特に3番目の、両方見たグループにつきましては、副教材のあるグループとないグループということで、サンプル総数は少ないんですけれども、一応仮説的に私たちが考えられるパターンをとっていろいろ意見を聴取したという次第です。

したがって、グループに分けてしまいますとサンプル数は非常に少ない

ものですから、あんまり構成比をひとり歩きさせないためにも、特に先ほどの自由回答部分につきましては生のままのものをご紹介した次第です。といいましても、一応くりますと傾向性が幾つか出てきておりますので、それをお話ししたいと思います。

一番最初のものは、皆様のお手元の「結果」と重なります。これは質問1のAの部分になります。「それでは、一番役立ったものはどれですか。一つだけ選んでください。」、これだけがクロス集計になっています。それ以外はすべてくくった、総数127としまして該当するものの構成比を全部出しているわけですが、このものだけがクロスになっております。と申しますのは、一番役立った教材は何かということですので、これはトータル127じゃまズくなりますから、それぞれのグループ別に集計を出しました。

左側にあります「テレビ」、「ラジオ」、「副教材なし」、「副教材あり」というグループですが、「TV・RA」と書きましたのは両方を見たグループです。上はテレビのみ、下はラジオのみということになります。

そういう条件のもとで、先ほどお話しありましたように、印刷教材がやはり一番役立ったという者が、どのグループにおいても高くなっております。約3分の1、3割から4割は、印刷教材というのが、まず「学習にとって役立った」、「テーマ理解にとって役立った」と回答しております。あとは、線が引いてございますが、テレビの場合にはラジオ、ラジオについてはテレビの欄は非該当を示しています。結果について私たちは10%ぐらい開けば差があるのかなのか、一応検定も出しておりますが、傾向として見ますと、ここで重要と思われるのは、ラジオの場合、それから、「副教材あり」の場合に副教材が役に立ったというのが、15%前後になりますけど、一定出ている。これは何だろうか、この辺はもっと今後深めていきたいと思っております。

それと、各質問別に幾つかコメントしなきゃいけないことがあるんですが、大きな特徴、結果につきましてはデータを見ていただくことにしまして、次に質問8、一番最後になります。AとBに分けまして、教材（番組）がよくできていたかということと、おもしろかったか、この二つを聞いたわけです。これ

について、総数は皆さんのお手元にあるわけですが、質問7で学生に既に履修した科目数及び取得単位数を聞いておりますので、これを掛け合わせまして、一応大きく特徴を見るために、15科目以下と16科目以上の2グループに分けました。で、「よくできていた」の割合を問うたわけです。

放送大学の場合、初年度入学の学生は今1年と、それから、1学期分が終わっておりますので、サンプルを見ますと大体その縮図になっておりまして、単位数ですと約2倍ちょっとすればいいわけですので、30単位から40単位取得した学生が大体中心になっておりましたので、そこで度数分布をもとに2グループに分けたという、単に技術的な問題になりますが、これを見ますと、テレビの方が、「よくできていた」という者は15科目以下、まだ学習量が少ない人——これは成績では決してないと思います。大体教材を視聴するチャンスが少ないということになると思いますが、そういった人の場合はテレビ「よくできていた」という意見多く、数の多いグループの方(16科目以)が、ラジオの方がよくできていたという傾向ですね。一応これは検定でも有意差は出ますけれども、どの程度までかはもう少し検討しなければいけませんが、一応この傾向の中で、学習の頻度数といえますか、とメディアとの関係があるのかなと、私たちチームの方で話し合っている次第です。

あわせて、「おもしろさ」については今ほど顕著ではありませんけれども、特にラジオの方のおもしろさというのがわかって——ちょっと、解釈し過ぎかもしれませんが——くるのは、一定学習を重ねていっているメンバーというようなとらえ方もできるのではないかとということで、これを出してみた次第です。

それと、今回は大阪大学の大学院生のグループの方たちの場合には最後にテキストになっていましたけど、放送大学の場合事前にテキストが送られて、まずそれを学習してから番組視聴するというパターンになっています。実際には放送だけを見たり聞いたりする方もあるわけですので、番組がそれによってテキストの学習へと動機づけるという面はあると思うんですが、今回の場合にはとにかく読んでいます。さらに、今回新しいのは副教材を加えた点があります。

これはスタディー・ガイドと呼んでいます。ただ、スタディー・ガイドという言葉が学生にはちょっとなじまないということで、副教材という言葉で徹しまして、括弧書きで「スタディガイド」と使っております。

この副教材の貢献度というふうにとっておりますけれども、スタディー・ガイドについて尋ねたものが質問5に全部ございます。これはテレビ、ラジオ別に聞いているわけですが、これをテレビだけ見たグループ、ラジオだけのグループ、それから、テレビ、ラジオ両方見たグループということでクロスさせたものです。これは「大変役立った」と「役立った」と両方のグループがあり、特に「大変役立った」というところは、テレビ、ラジオ両方見た場合にはやはりラジオが高くなっておりますし、テレビのみ、ラジオのみの場合に比べた場合、いずれも矢印のように多くなっている。これは一つの傾向として言えるのかなと……。この辺はもう少ししっかりした調査でもう一度検証していく必要があると思いますが、副教材に関して一応メディアとの関係を示してみました。

副教材のことと、もう一つは印刷教材、厳密には副教材も印刷教材の中に入るんで、むしろこれはテキストという意味を持ちます。印刷教材のテキスト部分ですが、これが放送教材と重複していることについて学生はどうとらえているかということを、尋ねました。これは私も放送大学におりまして学生と、特に授業、また、いろんな面で接しまして、そのダブリについて非常に喜ぶ学生と苦情を申す学生と、両方いるわけですね。どういう結果が出るかと見ましたら、トータルは皆さんのお手元にあると思いますが、「重複はあって良い」というのが非常に多いんですね。

ただ、結果から言いますと、「副教材のないとき」を左側に、右側に「副教材のあるとき」ということで、二つに分けているわけですが、いずれにしても、左側よりも右側の方が「重複があって良い」——「重複はないほうが良い」と「どちらともいえない」というのが裏に入ってくるわけですが、学生に直接聞きますと、あった方がいいんだという雰囲気はかなり持っていますので、それが副教材が出たことによって、ぜひなければというんじゃない

くて、「なくてもいいかもしれない」、あるいは「どちらでもよい」と変わってくるというふうに、この数値を読むこともできると思います。

細かくは色で分けてありますけれども、テレビ、ラジオでやはり先ほどから申しているような違いが出てきているわけです。

ただ、学生の実態から言いますと、テキストを読んで番組を見てというふうになるんですが、実態としては両方見られないという中で、重なっていると助かるんだ、なんていうようなことを、調査を終わりましたから聞きましたら言っておりますので、実態の問題はありますけれども、一応ここでもし両方全部学習できるという条件のもとでしたらということではいきますと、やはり副教材の役割というのが大きいといえそうです。特にここでは、一つの傾向性ですが、ラジオの方でその副教材志向といいますか、があるのではないかという、これも仮説ですけども、一応読み取っている次第です。

その他、いずれにしても——お手元の資料、数値の中にもありますし、自由回答の中に書かれているのですが、今回の番組を見て、ないしは聞いて、「文化変化と文化変容」について非常に興味を持った、勉強した、ということがその表現でかなりたくさん書き込まれています。

さらにもう一つは、文化人類学って何だということについて、両方ともかなり興味を持っていた。それについては特にラジオの方が、「文化人類学とは」というような概念的な説明が入ったせいかと思いますが、その辺について記入が多く見られる傾向があるかと思いますが、細かくは数字としては数え上げておりません。

さらに副教材につきましては、資料、データが非常に役立った、と。初めからテキストに載せておいてくださいなんて書いてあるのが随分ありましたけれども、テキストは量との関係もございますが、副教材については学生たちは非常に喜んでいました様子です。これはむしろ、調査の実施に当たって直接感じた私の印象です。

急ぎ足になりましたけれども、以上、「結果の概要」という形でご報告申し

上げたわけです。

全体の先生方の結果も出ておりますが、あと必要なところでご報告させていただきます。

○司会

どうもありがとうございました。

このような学生の反応があったということでございますが、ここでひとつ、こういうふうなことをやりました意図につきまして、このグループをつくってずっと進めてきていただきました祖父江先生にこのご説明をいただきまして、あとは祖父江先生の方でその必要な参加者の方々にもよろしくお願い申し上げます。

○祖父江（放送大学教授）

先ほどからテレビとラジオで何か顔と声はいろいろお聞きいただいたと思いますけれども、生の発言はこれが最初でございますので。今回は私どものつくりました作品をごらんいただきまして、また、いろいろとご意見をいただきまして、また、特にパネリストの方々には大変いろいろと役に立つセッションをいただきまして、どうも大変にありがとうございました。

そこでまず最初に私どもの意図と申しますか、このチームということについてちょっとご説明をさせていただきたいわけでございますけれども、普通これは英国の公開大学なんかの場合にはコース・チームというのが大変なものになっておりまして、これはきのうのご発表の中にもちょっと出てきたわけでございますが、英国の場合、そして特に、それを受け継いで日本でもやはり同じようにコース・チームを考えていかなければいけないというお考えの方もおられるわけでありまして、普通英国型の場合にはその教官のほかに、教育工学とか、あるいはデザイン関係とか、必ずその中にいろいろ入らなければいけないという伝統的な決まりが大体あるようでございます。

そして、これはタイなんかの場合にもそうであるというふうに承っておりますけれども、私どもの放送大学におきましては最初からコース・チームという

ふうな考えはありませんで、これはきのうの小林先生のご発表の中にも出てきたわけでございます。

そこで、今回の場合におきましては実験的に教授だけで、そしてもちろん放送大学の場合には教授及びディレクターということでやっていくわけですが、それをさらに拡大いたしまして、今度は実験的に、これを何と呼ぶか、一応コース・チームというような名前では呼んでおりますが、そのチームというふうなものをつかって、これがずっと昨年からいろいろと討論を行いながら、このプロジェクトというものを進めてまいりました。

それが要するにこのテレビとラジオと印刷教材というものになるわけですが、そこで今回はまず最初このコース・チームのメンバー、実はこちらにずっと座っているメンバーがそれでございます。一応私の方をらご紹介させていただきまして、この制作の意図につきましてはそれぞれの担当の方からお答えを申し上げるということにさせていただきたいと思います。

まず放送教育開発センターの赤堀ディレクター、先ほどのテレビの制作を赤堀さんが担当いたしました。

それから、同じく放送教育開発センターの島田助手。「スタディガイド」、副教材を担当いたしました。

それから、同じく開発センターの島田助手。「スタディガイド」、副教材を担当いたしました。

それから、放送大学の橋本ディレクター。橋本さんは、今回はお見せする時間がございませんでしたが、今放送されております、これは実験番組ではございませんで、15回の文化人類学の番組をずっと担当いたしまして、それから、今回のテレビ番組につきましても赤堀ディレクターと協力して、一緒に現地へ行ったりしております。

それから、岡崎さんは先ほどもう既に登場しておられました。

次に、教科書を担当しております、放送大学教育振興会の水谷編集本部長でございます。

最後に、テレビ、ラジオ全体にわたりましていろいろプロジェクト、内容、方針を決めたりしておりますが、放送教育開発センターの杉制作部次長でございます。

なお、教科書の方、印刷教材は今お配りしてありますものは実験的につくったものではございませんで、これは普通に今学生たちが学習に当たって読んでいるものをそのままここにとってきて、その中の一部をここに出したわけでございますので、それもつけ加えさせていただきます。

それでは一応ご紹介を終えましたところで、テレビ、ラジオ、それから副教材というふうにこちらから順に、先ほどいろいろご意見が出ましたけれども、それにお答えする意味で、その制作意図と申しますか、こういうことを考えていたんだというような点につきまして、じゃあお願いいたします。

○赤堀ディレクター

テレビの制作を担当いたしました、赤堀でございます。

最近週刊誌上のはがきインタビューで祖父江先生が、文化人類学とは足で稼ぐ研究の学問だを書いておられるのを拝見してしまして、実はテレビの番組もやっぱり足で稼いでつくらなければ、デスクワークだけではいい番組はできないだろうということで、私は非常に意を強くしておりまして、祖父江先生とそういうことで話し合って、コース・チームをつくっていく上で非常にチームワークがよかったんじゃないかということを、まず最初にご報告申し上げたいと思うんです。

この「文化変化と文化変容」をつくるに当たりまして一番困ったというのは、「変容、変化」というのは「変化」のプロセスをどうしても紹介しなくてはいけないわけで、その場合に先程水越教授が言われたようにテレビは現在是非常に紹介しやすいんだけど、過去が紹介しにくい、と。これは事実なんです、そこで、過去を紹介した素材がないだろうかということでいろいろディスカッションいたしまして見つかったのが、テレビの教育的役割を記録した「山の分校の記録」です。これを使って、それではその「変化」を見ていこうということが最初のステップだったろうと思うんです。

下見に行きまして、ちょっと見たらそう変わりもないような山村なんですけども、これを「文化変化と文化変容」っていう形でどういうふうで紹介していったらいいかというのは非常に苦勞をしたわけなんですけど、最初に考えたのは、先ほど足で稼ぐということで、それなら先生がやはりその村へ入って行って、そして、講義をなさるのではなくて、先生が自分で調査をなさるような形で、その調査した結果から普遍的な法則をつくり出していくというのが文化人類学の方法論だろうと思いましたので、そういう手法をとったらどうだろうかということで、カメラが先生の目になってひとつ追いかけてみようというようなことをまず考えまして、そういう構成方法をとりました。

前半に関しましては若干そういうインタビューのパートが少ない場面もありましたけれども、基本的には先生がインタビューした内容を軸に——先生がインタビューできなかった場合は私がかわりにインタビューをしたんですが、やっぱり先生がお上手だったなというような感じがしているんですけども、さすがに先生でございまして、私たちよりはやはりその目的に合った話題を掘り出しておられたと思うんですが——それを軸に構成をしたというのが一つの構成方法です。

それから、これは私や堀江さんもやってきたんですけども、教育番組を構成していく上で二つの方法がありまして、一つは、大体教育番組というのは、伝えたい情報というのがまずあるわけですね。難しい言葉で言えば教育目的ということになるでしょうけども、その伝えたい情報を一番最初にある程度解説する方法、演繹的方法と言ったらいいでしょうか、あるいは、例えば理科番組ですと、実際に実験をいろいろやってみて、ほう、こういうことからこういう事実がわかるんじゃないかという帰納的な方法と、あるいはそれをミックスする方法というのがかなり多いわけなんです。

今回の場合は、もうごらんになってわかりますように「文化変化と文化変容」っていうのをまず外国の例で出しておきまして、それでその具体的な例をずっと並べていった。そこに若干雑然とした感じがあったかもわかりませんが、何せ45分を興味を持って見ていただくにはかなりの材料が要ります。そ

ういう意味ではやっぱり、あのくらい事例を並べないと皆さんお飽きになるんじゃないかと思います。若干少なくしますと、あれは少し単調で飽きたというふうにおしかりを受けるんじゃないでしょうか。このバランスは、番組をつくる方としましては難しいことなんですけども、興味深く見せるという意味でいろいろ実例を重ねていきまして、そして、「文化変化、文化変容」というのは大体こういうものだということを感性的に感じ取っていただく。で、いわゆる概念として正しく理解していただくには、やっぱり印刷教材にお願いするというような形で番組を構成をしたわけでございます。

それからもう一つ非常に気をつけてやったのは、ドキュメンタリー・タッチということなんですけども、実際これはドキュメンタリーと申しましてもしわゆる意外性を追いかける報道番組のドキュメンタリーとは全く違まして、一つの「文化変化、文化変容」という伝えたい内容があって、そしてそれにピッタリの場所を探して取材をしたという形でありますので、映像記録を積み重ねてある情報を伝達するという純粹ドキュメンタリーとは若干違うと思うんですが、しかし、やはり何らかの意外性をつけ加えたい。そういうことによって、見る人とのシンパシーというか、同一感というんでしょうか、あるいは参加感というものを何とか盛り込みたいというのが、私の希望でございます。

そういう意味で、例えば山村の中で非常に近代的な生活をしているとか、あるいは子供がピアノを弾いているとか、やはりさまざまな——今から言えばアッと驚くものではないかも知れませんが、言ってみればちょっとおもしろいなと思うようなものをなるべく盛り込んでいこうということで、そういう形で番組をつくりました。

そういうことで、文化映画とドキュメンタリーとの違いといえは、そういう意外性というものを盛り込んでいくということだろうと思いますので、ドキュメンタリー性をなるべく強く出していこうということで構成をしたわけであります。

それからもう一つ申し上げたいのは、これは実験番組でありまして、非常によかったことは、チームでディスカッションしながらやっていったということ

と同時に、やはりその制作期間と、それから、お金のことを言っておかしいんですけども、かなり時間的に余裕がありました。ロケ下見と、それから構成を立てて、それから、1回だけではちょっと時間的に足りませんで、2回にわたりましてロケをしたということがありまして、そういう、かなり恵まれた条件でつくったわけで、今の大学番組の制作体制からいきますと、そういう意味では少し得したんじゃないかというような感じがしているわけでございます。

最後に、一番よかったことは、過去のフィルムが、「山の分校の記録」という、これは教育番組の最高の賞でありますイタリア賞を取ったフィルムがあったということだろうかと思っておりますが、かなりそれにおんぶしたというところがありまして、今度つくるときは、もっと新しいものを見つけ出していきたいと考えております。

○小町ディレクター

ラジオの番組を担当した小町ですけれども、一般に放送大学の学生にとって、ラジオの番組は余り評判がよくないというふうに聞いております。これは、この実験番組のチームをつくるときに小林副学長からもそういうお話がございました。

どうしてそう評判がよくないのかっていうことを、今までの経験をもとにごく簡単にまず整理をしてみたいと思うんですが、一つは、ほとんどがストレート・トークで、しかも、その話がわりに単調になり平板になってしまう傾向があるということです。解説的っていいですか、説明的っていうか、講師の感情が中に入っていないっていうか、受け手の方にとってみればその話の中に感情移入できない、そういうような問題が一つあるかと思います。

それからもう一つは、ストレート・トークのために一本調子になって、変化がない、変化がないために眠くなってしまうっていうような問題があるんじゃないか。

三つ目は、学問の世界と放送大学の学生の内的な世界との間につながりがなかなかなくて、内容に親しみが持てないというようなことがあるんじゃないか。

それから四番目は、きのうのディスカッションの中にもありましたけれども、

なぜこれを学ぶのかっていう動機づけがはっきりしない場合があるっていうことです。

それからあと、印刷教材と内容的に重複してほとんど同じで、聞かなくても印刷教材を読めばそれで済んでしまう。

そんなようなことがあるんじゃないかと思いました。こういうふうに言ったのは、私自身がこういう番組をつくっているということもあるわけで、そういうことをちょっと棚に上げて言わせていただくと、こういうことがあるんじゃないかと思います。

ただ、大学の外の世界、特に若い人の世代にはラジオの番組っていうのは大変強い支持があります。それはどういうところに支持があるかっていうと、ラジオというのはパーソナルなメディアとして、自分の非常に身近なメディアとして共感を持ち、支持を受けているっていうふうに言っているんじゃないかと思うわけです。

したがって、この実験番組をつくるに当たって私がまず考えたのは、そういう、ラジオの持つパーソナルなメディアとしての特徴っていうものを生かした番組をつくれなにかということです。もちろんテレビの場合でも恐らく学生は一人で家庭で聞いているわけでしょうけれども、テレビを前に置いて、それと向かい合って見るというような感じになると思うんですが、ラジオの場合にはラジオに対峙してというか、向かい合ってというよりは、何か自然に耳の中に音が入ってくるっていうような、あるいは音の世界に包まれているっていうような感じでラジオというのは受け取られるのではないかと思います。

そういう特徴というものをうまく生かすにはどうすればいいかということで、一つは、講師の持っている個人的な話っていうものを何か話の中身に盛り込むことができないか。例えば研究のこういうことに関心があるんだとか、こういう経験をしたんだとか、こういう考えを持っているんだとか、あるいはこういう失敗を実はしちゃったんだとか、そういうような個人的な話というものを入れることができないだろうか。そういうことによって講師を身近に感じることができるし、あるいはその講師の学問、あるいは対象としているその学問とい

うものを身近にすることができるんじゃないか、そういうような気がしました。

この点については、講師及びこのテーマに大変恵まれていたのがよかったんじゃないかと思いますけれども、そういうことをやってみようとまず思ったわけです。

それからもう一つは、学生は生活経験が非常に豊富なわけですから、そういう生活者としてのいろんな経験というものを番組の中に盛り込むような、生活者としての身近な素材を取り上げる。このテーマについて言えば日本の問題、日本における文化変化、文化変容の問題を取り上げるというようなことを考えたらいいいんじゃないかと思いました。

パーソナルなメディアとしての特徴を生かす番組ということが一つですが、2番目の問題としては、ラジオがモノトーンな単調な番組になってしまうということを何とか崩したいということで、一つは内容をなるべく構造化するっていうことを考えたわけです。テキストを読みますと、これをずーっとそのまんまやっていくとどうしても、事実っていうか、いろんな内容の並列的なことになる、そういう可能性を持っているんじゃないかと思ひまして、印刷教材と重複する部分と、印刷教材にはない部分と両方うまく組み合わせていこう……。その場合に、ない部分としては、さっき言ったような講師の個人的な経験なり、それから、学生に身近な素材を取り上げるっていうことですが、それと同時に、それをどう構造化するかっていうか、立体化するかっていうことで、文化変容のタイプ分け、日本に入ってくる場合にどんなタイプがあるのかとか、あるいは世代によって文化変容の受け入れ方にどういう違いがあるのかというような問題を取り入れたらどうかと考えたわけです。

それからあとは、その単調さを破るための演出面の工夫としては、音楽とか効果音とか朗読とかをどう入れるか、何をどう選ぶかというような問題で、一般的に、ストレート・トークでなくて、ナレーターをつける場合の役割の分担としては、いわば事実の提示の部分というのは音だとかナレーター、語りでやる。その意味づけっていうのは講師にお願いするというような形で役割分担をするということができるかと思うんですけども、でも、今回のテーマについ

てはその手が非常に使いにくかったわけです。

というのは、事実と意味とがなかなか切り離せないものを持っていて、それで講師の特に個人的なお話というのが入ってくるために、そういうことができにくい。それから、先生のお話が大変おもしろいのでそういう手は使いにくいというので、音とか語りの役割としては、一つは講師の話を聞くための構えをつくる、いわば動機づけをするっていうようなこと、あるいはムードをつくるっていうようなこと、それからもう一つは、話題の転換を図るために間をとるっていうようなこと、そんなようなことに音の役割を持たせようと思いました。

番組をお聞きになっていておわかりだったと思いますけれども、話の内容と音との間には、非常に密着している部分もありますし、それから、わざと距離をおいた部分もあります。密着している方が全体の流れはスムーズにはいくと思ったんですけれども、そういうふうにして耳に当たりのいいっていうか、スムーズに入ってくるものよりも、わざとぎくしゃくするようなものの方が、場合によっては、すぐの調査では結果は出てこないかもしれませんが、いわば冷酒っていうか、ローブローというのは後から効くっていいですが、そういうようなものもあるのではないかっていうことで、例えば“オーマイダーリン クレメンティン”のように、本当はあれはあそこへわざわざ出さなくてもいいようなものですが、そういうものをわざと選んで入れてみた。これは、学生にとってはわりに耳になじんだ音楽だろうということもあって選んでみたというようなことです。

あと、番組のおしまいにまとめをするのがいいというような話がきのうありましたけれども、今回のこの実験番組の制作に当たっては、印刷の副教材がある、スタディー・ガイドがあるというようなこともあって、そういうまとめはいたしませんでした。

それから、制作の手順としては、普通ですと先生と打ち合わせをして、それでもうすぐについていうようなことになるんですけれども、今回はコース・チームとして印刷教材を私の方で読んで、つまり先生の方からこの印刷教材っていう形での球が投げられていまして、それについてこれを読んだ上で大まかな番組

のイメージをつかって、これでいいかっていうような形で先生の方に投げ返す。それから、先生がそういう方向でいいとなったときに、じゃあその方向で先生の引き出しの中にどんなものがあるのか、つまりこのテキスト以外のものを使うということですから、先生の持っている引き出しに何があるのかということなことでそれを出していただいて、この間では、例えば隣にいらっしゃる島田さんからもサゼスチョンいただいて、より具体的な素材に基づいて今度具体的な構成案をつくるということができました。

それに基づいて今度は講師の先生のお話の第1回録音をとって、その録音に合った音を——あらかじめイメージはあったんですけども、さらに探す。今度は先生のお話をその音に合わせて多少修正をするというようなことで、そういうキャッチボールを何遍もやるということができた。これは先ほど赤堀ディレクターが最後に言ったように、この番組の制作にとっては大変恵まれていたし、コース・チームとしてはそういう手続をとったんだということをご報告して、少し長くなりましたけれども、私の話を終わりたいと思います。

○島田助手

副教材についてですが、これはつくる方としては非常に気楽であります。なぜ気楽かと申しますと、現在の放送大学では印刷教材と放送教材の二つありますが副教材というのは制度的にはないわけです。したがって、今まで先例がありませんので、他と比較される心配はない。良いことは言っていた割に、批判が少ないのはそういう結果ではないかと思うんです。

今回の制作の手順が、既に『文化人類学』の講義が放送大学で始まっているので、印刷教材はもう完成した形であるわけです。この印刷教材に関しましては、一応聖域といいたいでしょうか、手を触れないということで、それはそのまま使う。その上にコース・チームとして、あるいはディレクターのイニシアチブという形で、テレビ、それから、ラジオというものをつくるということになりました。

今回チームの中で話し合ったのは、各自ができるだけ勝手に自分の思うとおりにつくってみようということで、その部分では個人的な作業という色合いがかなり強かった。特に、テレビとラジオは全く違うものをつくらうということ

で、実際でき上がったものも全く違います。同じ題材を扱っているのにこれだけ内容が違ふし、それから、受ける印象も違ふというのは、ディレクターの個性が発揮された結果ではないかと思います。

ただ、副教材をつくる準備はしていましたけれども、実際につくったのはテレビ番組とラジオ番組の両方ができた後なんです。したがって、今回皆様にお配りしてありますオレンジ色と緑色のものはオフセット印刷になっていますが、これは実は学生に調査した段階では単なるコピーでありまして、僕が全部自分でコピーして、ホチキスでとめて作りました。ですから、かなり粗末なものでした。今回も一部は手伝ってもらいましたが、自分でワープロを打ち、割りつけもしたわけですので、素人がつくったようなものです。できてもあんまりよくないんです。

ただ、こういうスタディー・ガイド、副教材は手づくり的な要素が元々強いのかもしれません。費用についても、今回のテレビは400万だか500万だかよくわかりませんが、そのぐらいの費用はかかっていると思います。ところが、副教材の方はそれに比べれば100分の1以下だと思うんです。単純に比較するのは意味がないと思いますが、「一番役立ったのはどれか」という項目で16.7%も支持を得ているところを見るとはなはだ心強い気持がします。

それからテレビの副教材とラジオの副教材で、両方見たという人たちの中でテレビの副教材が一番いいという評価をしている人は全くいないのに対して、ラジオに関しては16.7%ある。これについて岡崎さんは説明なさいませんでした。僕なりに考えてみますと、これは理由があると思うんです。ラジオの方ですと、祖父江先生が今まで研究なさった、例えば食欲がないときに何を食いたいとか、外来文化の受容の三つのパターンとか、これは既に調査に基づいた研究があって、それを織り込むことができたわけです。ところが、この土呂部の場合ですと、ここは祖父江先生のフィールドではありませんので、そういうものが資料としてないわけです。

フィールドワークは、ご存じのとおりそう簡単にできるものではありません。今回我々が試みましたが疑似フィールドワークは、単に夏のある期間だけ、特定

の期間だけをやった、それもロケが主体という不完全な形でしたから、フィールドワークをしたとは言いがたい。その点でフィールドワークの厚みみたいなものが若干欠ける結果に終わった。我々自身が見出してきたデータ、資料というものがなかった。テレビの副教材が一番いいという学生の評価が全くなかったというのは、そういう深みといいますか、調査の厚みを反映できなかったという点にあるのではないかなと思います。

この副教材というものは現在の放送大学では取り入れられていません。しかし、放送教材と印刷教材とを結ぶものとして重要なものであることは間違いありません。先生がただ講義をするだけのストレート・トークは、放送というメディアを使う意味がないという点については昨日から繰り返し強調されてきましたので、今さら申し上げることもないと思います。ただ、これは我々にもありがちなことなんですけれども、なれてきますと今度は、特にテレビの場合ですと、映像主体の番組をつくりたくなる、あるいはそれの方がつくりやすくなるわけです。

ところが、現在の放送大学の番組を見てみますと、必ずしも映像を使ったものがそれだけの効果を発揮しているかどうかという点、少々疑問な気がします。それは、印刷教材・テキストと放送授業がどう関連性を持つかがどこにも揭示されていないからです。

例えば、「日本の社会」という講座があったとします。印刷教材には概論風の説明があります。そうすると、テレビでは日本全体を扱えないですから、当然一部だけを取り上げるわけです。新しい町ということで例えばこの幕張を取り上げたとすると、幕張というのは印刷教材の中で1行ぐらいしか触れてないのに、番組の中では3分の1も使ってあるとか、そういう番組というものがもしあったとしたら、見る学生の側は、なんで幕張みたいなところを取り上げたのか……。それに関する説明、つまりテレビをどうやって見たらいいかという説明がないと、それがわからないのではないのでしょうか。

そういう番組を見てみますと、ストレート・トークの番組よりも実は、教育的な効果といいますか、内容の質としてはむしろ落ちるんじゃないか。そうい

う危険性というものに陥らないためには、やはりもうちょっと両者の関係性—その場合にその取り結ぶ媒体として副教材が考えられますけれども、もっと先に進めば、これは先ほど岡崎さんの、学生の声の中にもありましたが、最初に印刷教材の中に、番組をどういうふうに見たらいいかということを取り組むといえますか、あらかじめそういうものを意識してつくれば今以上にすぐれた教材ができる。恐らくそういうふうな形にこれから発展していくんだろうと思うんです。そういう意味での印刷媒体と放送媒体の関連性、構造化というか、それが我々のこれからの課題ではないかと考えられます。

○司会

祖父江先生、いかがでございますか。こういうふうにおやりになられまして、このテレビ番組、あるいはラジオ番組、それから、島田君のつくりましたものが先生のご講義の体の一部のごとくお感じになられるか、あるいはまた、こういうものを彼らはつくったか、（笑声）そういうことを一言言っていていただいて休憩に入りたいと思います。

○祖父江（放送大学教授）

どうも大変難しいご質問で。（笑声）

そうですね、これ、両方にも感じられるのです。やはり、今これ見まして、もちろん、この部分は部分的にはこうした方がよかったのではなかろうかとか、そういう点はあちらこちらにございます。ですけれども、意図といたしましてはやはり全体としては私がねらっていたところは大体出ていると思います。

特に、先ほどラジオの特徴、テレビの特徴ということで出てまいりましたけれども、特にラジオの場合には私自身がパーソナルな問題というのを——これは実は小町ディレクターの方から、最初にディスカッションやりましたときに、何回かのディスカッションで、ラジオの方は非常にパーソナルな点が出てくるというのが特徴ではないかというんで、なるほどと思って、できるだけその面を出すようにいたしましたんですが、今振り返って改めてこれ見まして、やはりその長所が大変よく出ていていいなという点を痛感いたします。

それから、いろいろ細かい点につきましては後で総合討議の中でまた申し上

げたいと思いますけれども、ただ、全体としては一つだけ申し上げたいと思いますのは、私、放送大学へ来る前にNHKの教育テレビなどにはときどき顔を出したりしておりましたんですが、そのときの経験では、とにかく台本が決まっています、先生ここで、このところで何かこういうふうなことをしゃべっていただけないかというようなことで、もちろん内容につきましてはこちらがいろいろ考えるわけですが、大体台本ができていて、ラジオの場合ですとちょっと長くなりますが、テレビの場合ですとそういうふうな台本の中でやる。

そのつもりで最初こちらへ来て、これは恐らくほかの先生方もそうだと思うんですが、台本ができているんだと思っておきますと、実はディレクターの方ではこちらの方で何か決めてくれることを期待しているんですね。ところが私どもの方はディレクターの方で何か決めてくれるだろうと期待しております。最初のうちはその点で大変に戸惑いました。

しかし、次第になれてまいりました。今までNHKの教育番組のディレクターなんかとはいろいろ顔を合わせたりはしておりましたけれども、このように詳しく話し合いながら、しかも、作品ということについて、こちらはただ単に番組に出演する講師というだけではなくて、ここはこうしたらいいんではないかとか、そういうことを協議する機会が沢山ありましたので、私にとっては放送大学に来てからの初めての体験ですし、特に今回の実験的なプロジェクトというのが非常に新しい経験で、随分教えられ、かつ勉強することが多かったように思います。

実は文化人類学の方では最近一つ新しい部門として出てまいりましたのが映像人類学、visual anthropologyという部門でありまして、これはフィールドワークとか、いろいろな民族をいかにフィルム、写真に撮るかということの研究するものなんですね。ですから、その意味で私にとっては非常に勉強になりました。実は先週1週間、大阪の国立民族学博物館で映像人類学についての国際シンポジウムがありました。フランス、アメリカ、イタリアから数名、日本からも数名、10人ほどで1週間にわたってのシンポジウムを行なったのですが、私自身は今日ここでとりあげられた問題を報告いたしました。つま

りフィルムをどのように人類学の教育に使うか、という表題でありまして、こういうプロジェクトが今放送大学と放送教育開発センターにおいて進行中であるというようなことを報告したんですけれども、私にとては大変勉強になる新しい体験であったということを、つけ加えさせていただきます。

＜討議＞

シンポジウムにおいては、パネラーからの意見発表の後、質疑応答が行なわれた。外国からの参加者が多かったこともあって、議論は活発で、予定の時間をオーバーして午後3時15分から、4時45分まで続いた。以下は、その討議の報告である。

●今後の番組はどういった方向で作られるのか。

○杉 今日番組はあくまで実験であり、こういったものを実際に作っていくには予算の問題があって簡単ではないが、研究の成果をふまえて考えていきたいと思います。

○小林靖雄（放送大学副学長） 今回の実験はこれからの放送大学の教材をよりベターにしていくための試みとして考えています。また、放送大学では印刷教材と放送教材とはイコール・ウェートで印刷教材を軽視しているということはありません。易しく、しかもレベルを下げないということをプリンシプルにしています。

●放送の45分というのは非常に長く感じられます。また、むしろメディアをミックスしていった方がよいのではないのでしょうか。

○昆野昭二（放送大学事務局長） 放送時間は大学設置基準や通信教育基準に規制され簡単には変更できません。今後の課題としたいと思います。

○木内実喜夫（放送大学制作部長） テレビとラジオの編成をどう有機的に結び付けるかを考え始めています。

○スリサーン（スコタイ・タマチラート公開大学） タイでは印刷教材を中心とし、テレビとラジオはその補助として考えています。番組の長さについては、テレビでは30分、ラジオでは20分にしており、これは調査の結果一番

効果的だと考えられる時間なのです。

○ウエガマ (オープン・ラーニング・インスティテュート)

私どもでは、大多数の人が支えるメディアということで郵便と電話を使っています。この場合には、学習対象に対する調査が必要です。その上でメディアを選ぶべきです。番組を視聴させていただいて、ラジオは受身的な感じがしました。対話型が求められるのではないのでしょうか。

○水越 年齢の違う相手によってメディアを変えるということも必要ではないかと思います。

●学習センターで面接授業をされていて学生に聞くと、放送大学の授業はおもしろくなくて暗いといいます。NHKの市民大学と比べて固苦しいのではないのでしょうか。

○堀江 まず内容によってメディアが選ばれているかどうかが問題です。また、もっと徹底的に先生方と番組の作り方について対話すべきであったと思います。そういったことがおもしろくない原因ではないのでしょうか。

●双方向性を持たせる工夫がいののではないのでしょうか。

○祖父江 放送大学の講義では一般の教室での講義とは違って、ジョークとか、他の学者の説の批判がしにくくなっています。ただ、時間としては45分というのは教える側にはやりやすいのではないのでしょうか。また、同じ科目でも内容によって、テレビ向きの部分とラジオ向きの部分があるように思います。

●メディアの役割分担について具体的な話を伺いたいと思います。また、印刷教材の果たす役割はどこにあるのでしょうか。

○祖父江 放送と印刷教材がどの程度ダブっていたらいいかは、学生の側ではなるべくオーバーラップしていた方がいいという意見もあって今後考えていかなければなりません。

○橋本 印刷教材があらかじめ出来ていない番組は暗い番組に通じるのではないのでしょうか。今回のテレビの場合には、祖父江先生のフィールドではないというところに限界があったように感じます。もっと、先生のフィールドで腰をすえてやってみたい気がします。

○宮治 私はラジオの方がおもしろかったのですが、それは先生が主役になっていたからではないかと思います。先生の人格がどう表現されるかが重要ではないでしょうか。

●中国の丁先生に伺いたいのですが、電視大学では一般の大学の教科書が使われているのでしょうか。

○丁（中国広播電視大学） 中国では著名な先生に放送での講義をお願いしていますが、先生方はご自分でお書きになった教科書を使いたいと考えています。テレビの番組は興味深いものでなければならないという意見と、講義の内容こそが重要だという意見の間で論争があります。調査でも、ラジオやテレビからは学びにくいという結果がでています。今回の調査も、主観に訴えるアンケート調査でしたが、客観的な調査が必要なのではないでしょうか。

○岡崎 客観的な調査は必要だと思います。

こうした活発な議論の後、阿部美哉放送教育開発センター研究開発部長の閉会の言葉で散会となった。なお、質疑応答の部分は編集部でまとめたもので、文責は編集部にあることをお断わりしておきたい。